

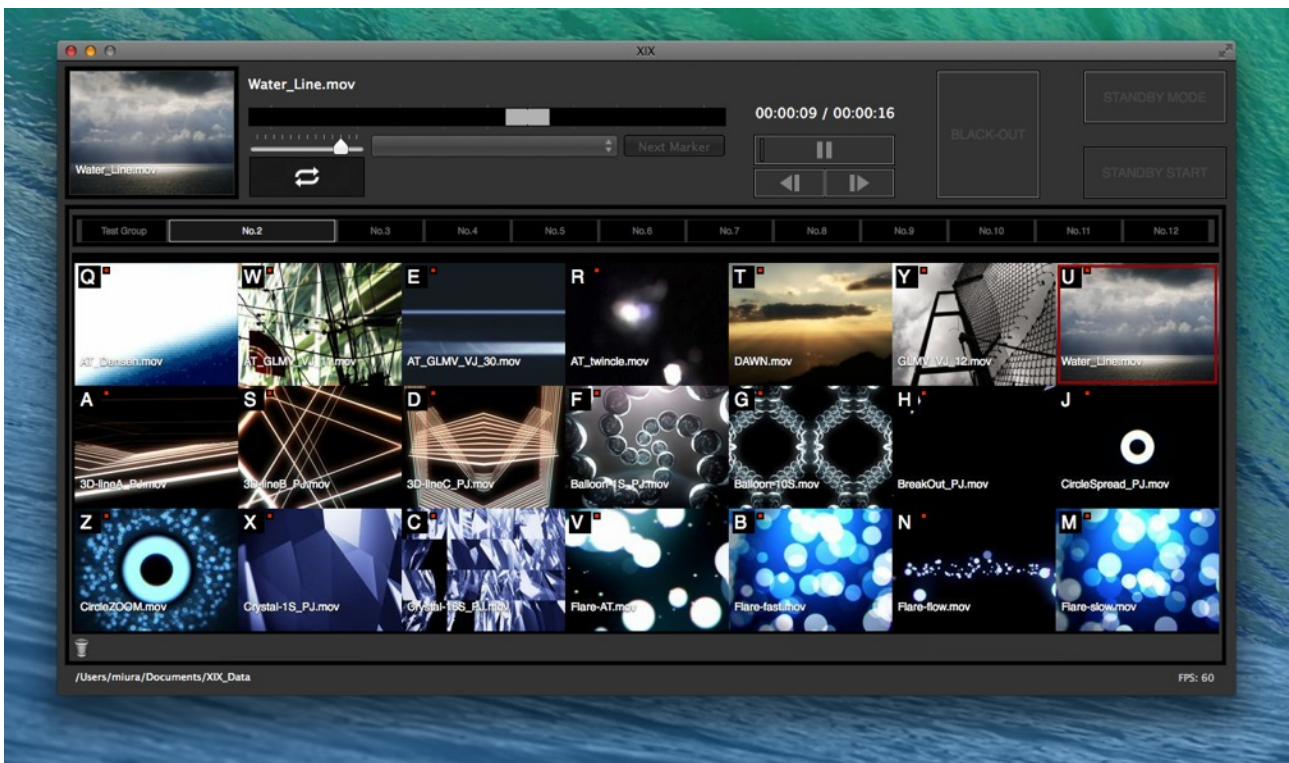


XIX v1.15 Manual(JP)

XIX

業務用向けポンだしソフトウェアです。1080p以上の解像度でも、安定したフレームレートをキープするようにチューニングされています。また確実なスタートを保証するため、スタンバイモードを装備。"Standby Start"のトリガーでムービーが開始されます。サウンドトラックもサポートしております。また指定した順番に再生を行って行くシーケンサー機能も搭載しております。

管理可能なメディア数は、1バンク当たり21（7x3）個の素材となっており、12バンク（252ファイル）まで使用出来ます。使用可能なメディアは、基本QuickTimeが扱えるムービーファイル（サウンドトラック含む）、もしくは静止画、またはQuartzComposerファイルとなります。



Data Folder

XIXでは、データフォルダと呼ばれるフォルダ内に管理ファイルが保存されます。また、各素材ファイルは、このデータフォルダからの相対パスとして、記憶されます。

インストール直後は、~/Documents/XIX_Dataフォルダが作成され、そのフォルダが選択されます。

Import Media

各メディアスロットを右クリックしますと、ポップアップメニューが開かれます。その中から、"Add Media..."を選択します。ファイルを選択すると、そのメディアが該当スロットにアサインされます。複数ファイルを選択しますと、該当スロットを基準に後方の空いているスロットにアサインされます。バンクを溢れた際には、次のバンクにアサインされます。

メディアのアサインを解除するためには、そのスロットをドラッグしゴミ箱にドロップするか、ポップアップメニューの"Remove Media"を選択してください。

またメインメニューのActionからMedia→Reset Current Bankを選択しますと、現在選択しているバンクの全てのメディアスロットをリセットします。

使用可能なムービーのコーデックは、基本QuickTimeが標準でサポートしているもののみとなります。例外的に、Hap形式をサポートしております。XIXは、このHap形式にネイティブ対応しておりますので、CPU負荷を抑え、高解像度のムービーファイルの安定化に貢献しています。そのため、推奨コーデックとして、このHapをお勧め致します。

<http://vdmx.vidvox.net/blog/hap>

<http://vdmx.vidvox.net/tutorials/using-the-hap-video-codec>

なお、既にメディアがアサインされているスロットには、左上に赤い四角い印が表示されます。

Media Operation

メディアスロットにメディアがアサインされている場合、それをドラッグして交換したいスロットにドロップすると、メディアが交換されます。別のバンク先と交換したい場合には、ドラッグ中に交換先のタブの上にドラッグイメージを暫く静止させます。そうするとそのタブが開かれますので、交換したいメディアスロットにドロップしてください。

ドラッグ中にoptionキーを押しながらドロップすると、ドロップ先のメディアスロットに複製される形でアサインされます。

Operation

メディアの呼び出しは、メディアスロットを左クリックか、メディアスロットの左上に描かれたアルファベットのキーを押すことで行えます。

XiXには、もう一つの呼び出し方があります。これは、スタンバイモードと呼び、メディアの準備をしておき、スタートするタイミングになったときに、トリガーを送る方法になります。

スタンバイモードにするためには、画面上部右の"STANDBY MODE"を押された状態にします。この状態で、メディアスロットをクリックしてみてください。この場合、再生が行われず、メディアの最初のフレームが表示されたまま停止されていると思います。次に、"STANDBY START"を押してみてください。このボタンがスタートのトリガーを送るボタンになります。スタンバイモードにある時には、メディアスロットの赤いインジケータが通常時よりも早い周期で点滅します。

Total Control

画面上部のエリアをトータルコントロールと呼びます。現在再生、もしくはSTANDBYのメディアのサムネイルが表示されます。また、再生位置を示すインジケータとタイム表示があります。タイム表示は通常カウントアップですが、クリックすることでカウントダウン表示にすることも出来ます。またインジケータを操作し、メディアの再生位置をシークすることも出来ます。

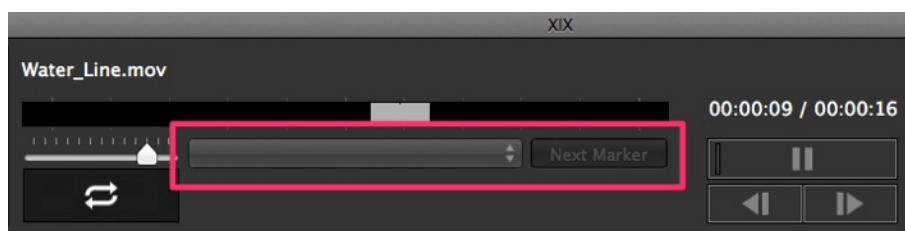
その他に、PAUSEボタン（再生の一時停止）、微調整ボタン（若干の間のみスピードアップ、スピードダウンを行います。頭出しがズレてしまったときは、これで微調整が行えます）、BLACK-OUTボタン（最終出力ウィンドウを真っ黒にします）

またメインメニューのActionにあるShow Test Patternを押すと簡易的なテストパターンが表示されます。

BLACK-OUTはシフトキーを併用することで、瞬時にブラックアウトすることが出来ます。

メディアファイルに、XMPメタデータのマーカが含まれている場合、その情報を認識します。マーカが1つ以上見つかると、下記のUIが有効になりプルダウンにはマーカのタイトルがリストアップされます。選択すると、指定フレームにシークされます。Next Markerボタンでは、プルダウンに含まれているマーカを順に選択することが出来ます。

マーカには必ずタイトルをつけて、レンダリングするようにしてください。



XMPメタデータについては、こちらをご参照ください。 <http://helpx.adobe.com/jp/after-effects/using/xmp-metadata.html>

Media Option

XiXには、各メディアのオプションとして、LOOPを行うか（ムービーファイルのみ）、サウンドトラックの音量（ムービーファイルのみ）、表示する際にストレッチするのか、LetterBoxとして表示するのか、Cropするのかを指定出来ます。

変更したいメディアスロット上で、右クリックしポップアップメニューを開きます。

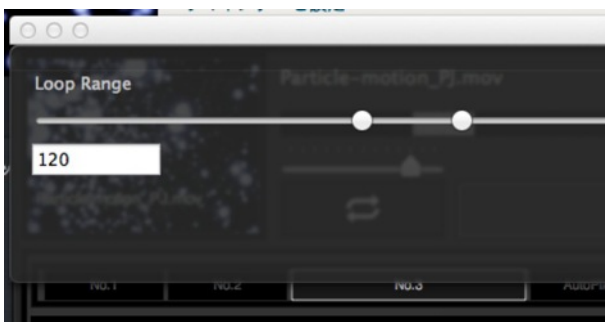
Take Thumbnailを選択しますと、現在表示されている映像をサムネイル画像として置き換えます。

Display Typeより、表示する際にストレッチするのか、LetterBoxとして表示するのか、Cropするのかを指定します。

Loopより、ループ再生を有効にするか、無効にするか指定します。画面上部のアイコンをクリックしても行えます。

Loop Endの設定は、ループ再生しない場合に有効です。ムービーが最後のフレームに来た場合、そのまま最終フレームを表示し続けたい場合には、Keep final imageを選択します。黒いフレームにしたい場合には、Blackを選択します。

画面上部のスライダより各メディアの音量を調整することが出来ます。



またPlay Range...より、再生ループの範囲を指定出来ます。スライダによって範囲を変更出来ます。また時間表示の部分をクリックすることで、数値を入力出来るようになります。このとき、秒単位で入力してください（例えば、120.5のように。この場合2分と0.5秒となります）。

Play Rangeの位置によっては、デコード処理に支障が出てしまい、フレームが一瞬再生されない場合があります。極力、デフォルト（全フレームを再生）の設定で再生することをお勧めします。

Final Output

XiXは、起動直後、640x480の大きさのウィンドウとして最終出力が表示されます。ここで、メインメニューのWindowよりShow Screen Settingを選びます。これにより、Screen Settingという小さなウィンドウが表示されると思います。

デフォルトでは、Movable Windowが選択されていますが、プルダウンメニューに現在接続されているスクリーンが列挙されていると思います。その中から表示したいスクリーンを選択してください。フルスクリーン表示を解除したい場合には、Movable Windowを選択してください。

Sequencer

Sequencerは、メニューのWindow/Show Sequencer Settingを選択すると表示されます。ここでは、順に素材を送出したい場合に便利な機能となります。

イベントの管理

メディアの登録（イベントの追加）

メディアスロットのサムネイルをドラッグし、Sequencerウィンドウのイベントテーブルにドロップします。ドロップする際に、イベントテーブル中に青いラインで挿入位置が表示されます。

イベントの削除

イベントテーブルの削除したいイベントをドラッグし、右下にあるゴミ箱に重ねる状態にしてドロップします。全てのイベントを削除したい場合には、ゴミ箱の横にある「REMOVE ALL」ボタンをクリックしてください。確認ダイアログが表示された後に全イベントが削除されます。

イベントの順番の変更

イベントテーブルのイベントをドラッグすると、メディアの登録時に表示されるような青いガイドラインが表示されます。移動先までガイドラインを動かして、ドロップするとその位置に入れ替えられます。

イベントのインポート・エクスポート

通常イベントテーブルの内容は、データフォルダ内に管理されますが、別ファイルに吐き出したい場合があります。その際には、右下の「Save...」ボタンをクリックしてください。ファイル名を決定後、seqという拡張子が付けられた状態で保存されます。ファイルのフォーマットは、XML形式のplistとなっています。また、seqファイルを読み込みたい場合には、「Load...」ボタンをクリックします。

イベントの設定

イベントは以下の項目を設定することが出来ます。

Offset

ムービーの開始時間を秒で指定します。通常は、ゼロ、つまり先頭から再生されます。

Duration

イベントの再生時間を秒で指定します。ムービーがイベントの再生時間より短い場合、Loop Action設定の挙動に従います。長い場合は、その時間で再生が打ち切れ、Next Action設定の挙動に従います。

Loop Action

ループを行うか、ループせずに最終フレームを維持するか、ループせずに黒いフレームを維持するかを設定します。

Next Action

ムービーがDuration分再生されたのち、次の挙動を指定します。「Immediate」では直ちに次のイベントを実行します。「Tap」の場合は、Sequencer上部の「Next」ボタンが待機状態になり、タップされるまで待つ状態になります。

Timeは、最初のイベントからの累計時間を示します。ただし、Next Actionが「Tap」の場合、時刻はリセット(00:00:00'00) されて表示します。

イベントの編集は、イベントテーブルを直接ダブルクリックし、値を編集するか、下部のプロパティビューで行います。プロパティビューは、イベントテーブルの該当イベントを選択状態にすることで有効になります。プロパティビューでの値設定の確定は、「SET」ボタンをクリックすることで行います。

プロパティビューのOffsetにあるプルダウンでは、AfterEffectsなどのマーカーから選択出来、Offsetを指定できます。マーカーが存在しない場合には空のリストとなります。こちらのマーカーは、Extensible Metadata Platformと呼ばれ、markersタグを読み込みます。

詳細につきましては、こちらをご覧ください。 <https://www.adobe.com/products/xmp/>

オペレーション

Sequencerのオペレーションについて説明します。

再生・停止

イベントテーブルよりイベントを選択します。通常最上部のイベントを選択し、「START」ボタンを押します。再生されると「STOP」ボタンにキャプションが変わります。停止したい場合には、「STOP」ボタンをクリックします。再生は、選択されたイベントから再生されることにご注意ください。

Tapアクション

Next Actionの設定で「Tap」を選択した場合、タップ待ちの間、「NEXT」ボタンが点滅します。この状態でクリックすることで次のイベントに移行します。

再生中は、イベントの変更、イベントの削除は行えませんので、ご注意ください。

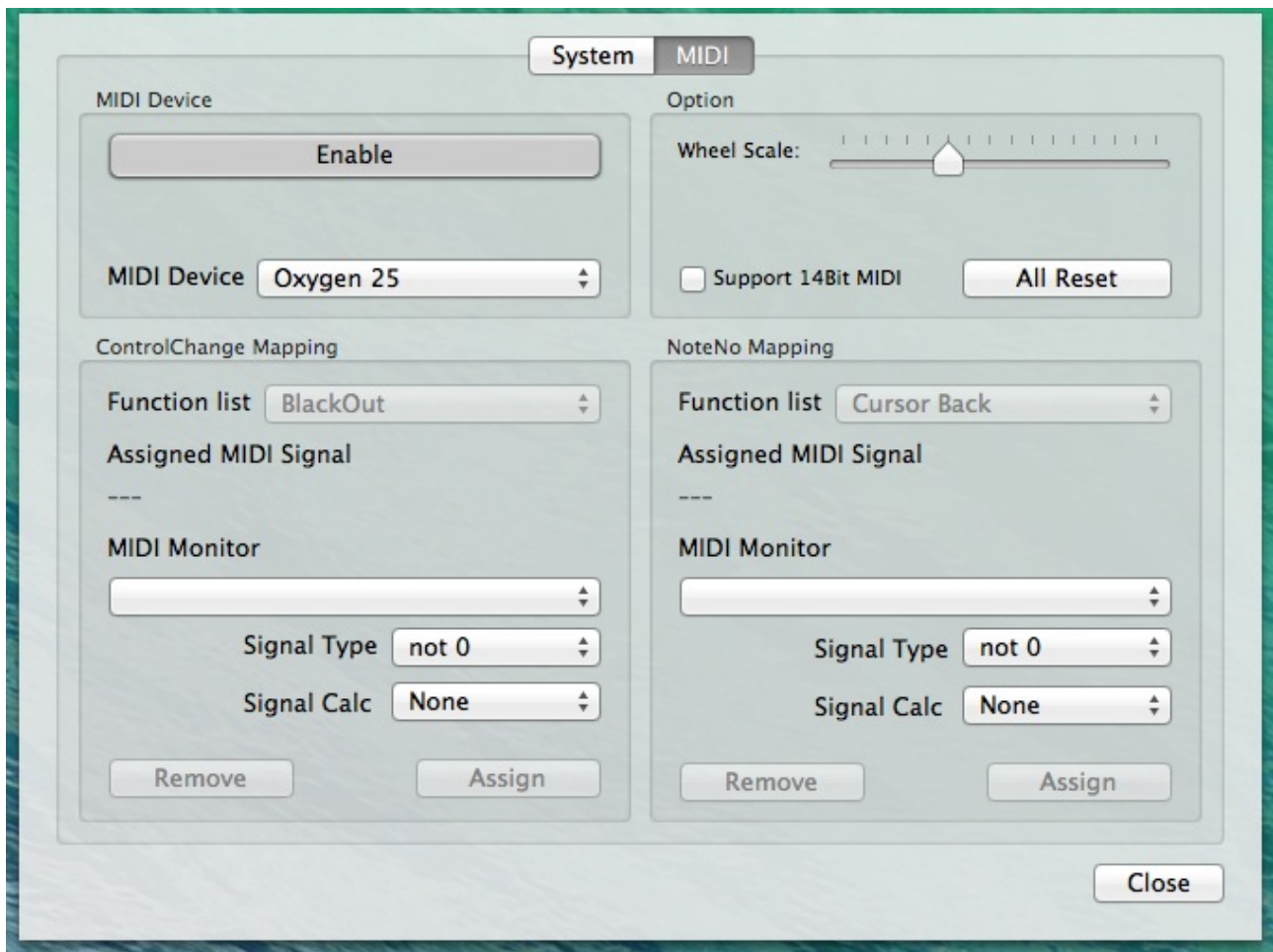
Syphon

XIXは、Syphonをサポートしています。Syphonの設定は、メインメニューのXIX->Preferencesを選択し、System タブをクリックします。

XIXの最終映像をSyphon Serverとして配布したい場合には、Syphon Serverボタンを有効にしてください。

MIDI

XIXは多くのオペレーションをMIDIにアサインすることができます。MIDIデバイスを使用する場合、XIX起動前にデバイスをMacに接続してください。MIDIの設定は、メニューバーのXIX->Preferencesを選択し※、MIDIタブより行います。



MIDI機能を有効にするため、Enableボタンを押します。これにより、現在接続されているMIDIデバイス一覧が、MIDI Deviceプルダウンに表示されます。MIDIデバイスに複数の入力がある場合は、全てが有効となります。MIDI Deviceを選択すると、MIDIモニタ機能が有効になります。

MIDIモニタは、実際にMIDIデバイスのスライダ等を動かすことで、MIDI Monitorプルダウンに受信した信号が表示されます。複数同時に受信した場合は、プルダウンから選択してください。受信した信号に既に機能が割り当たっている場合には、Function listプルダウンが該当機能に変わり、Assigned MIDI Signalに信号の情報が表示されます。

機能を割り当てる際には、MIDIデバイスで信号を送り、受信を確認（複数受信している場合は、MIDI Monitorでプルダウンメニューより選択の必要があります）、割り当てたい機能をFunction listプルダウンメニューから選択し、Assignボタンをクリックしてください。既に機能が割り当たっている信号に別の機能を割り当てたい場合には、Removeボタンを押して、一度解除してから割当を行ってください。

これらの操作は、コントロールチェンジとノートナンバーを独立して設定を行います。

コントロールチェンジとノートナンバーには、Signal TypeをAlwaysとnot Zeroから選択出来ます。こちらは、Alwaysの場合どんな値を受信してもトリガーされます。not Zeroはゼロ以外の値が来た場合にトリガーします。Signal Calcは、None：特に何もしない、Reverse：127-受信データのように値を反転させます。

オプション

機能の中でCursor WheelとBank Wheelは少し特殊ですのでご注意ください。受信信号の64をニュートラルとして、より大きい場合は+の値を、より小さい場合は-の値を使用して、ホイールの動きに対してカーソルを右移動（+）、もしくは左移動（-）にマッピングします。その効き具合をOptionのWheel Scaleで変更できます。

MIDI機材の中では14bitのレンジを出力できるものもあります。それらのサポートをしたい場合には、Support 14Bit MIDIをチェックしてください。おおよそチェックしないで使用可能です。

All Resetボタンを押すと、MIDIアサインがリセットされ初期状態に戻ります。

Contact Us

機能に関するご要望やご意見等ありましたら、下記窓口までご意見をお寄せください。

support@techlife.sg

また、Facebook上でのディスカッションも行っております。もしアカウントをお持ちでしたら、ぜひ参加をお待ちしております。

<https://www.facebook.com/groups/413767992078030/>

Thank you for your supporting.

TECHLIFE SG Pte.Ltd. : <http://www.techlife.sg/>